

第五回 九州戯曲賞 最終審査過程

九州地域演劇協議会まとめ

■ 最終審査日時等

平成25年7月27日（土） 大野城まどかぴあ

■ 最終候補作品（5作品）

福永 郁央	（福岡県福岡市）	『もうひとつある世界の森に巣喰う深海魚たちの凱歌』
佐倉 吹雪	（大分県別府市）	『紺碧。』
高橋 克昌	（福岡県福岡市）	『firefly』
後藤 香	（福岡県福岡市）	『タンバリン』
守田 慎之介	（福岡県行橋市）	『群れる青、トコロ。』

■ 最終審査員

岩松了、中島かずき、古城十忍、松田正隆、岡田利規

■ 審査結果

大賞 後藤 香 （福岡県福岡市） 『タンバリン』

■ 授賞方針等

- ・ 大賞作がでた場合、原則として他の賞は出さないものとする。
- ・ 大賞作の水準に達する作品がない場合は、大賞なしとする。
- ・ 大賞作がない場合、佳作・奨励等の賞を出すことが出来る。

■審査過程

各作品について、審査員からの講評をおこなう

『もうひとつある世界の森に巣喰う深海魚たちの凱歌』

携帯電話を失くし、慌てふためき探し回る男。ふとした瞬間に舞い戻ったそれは、覚えのない履歴で埋め尽くされていた。

日常的に誰もがやりそうなこと、なくした時点で始まっている迷路、という始まり方は面白い。シチュエーションが途中様々に変わっていくことの面白さが、言葉だけで止まっていて、うまく活かせてないという講評があった。

『紺碧。』

人生に息苦しさを覚える若者が3人、とある島で偶然に出会う。そこには、第二次大戦中に空爆を受けた小学校があった。

島の描写が面白い。猫が多い島であることやその猫が老婆に変わるところなど。実際に起こったことを題材にした作品だが、事実が強すぎて、最後は説明的になっていたのが惜しかったという見方があった。

『firefly』

降り続く雨。地図から消えた街。生きることを諦めた女が雨宿りを求めた屋根の下には、囚われた男がいた。男は両手を戒められ、檻のない牢に座している。

「聖者」と呼ばれる男がどんな罪か明らかにされないまま囚われているところ、「書き手」という第三者の視点を入れている所など、面白みのある戯曲だった。人の感情が表面上のみになっていて、奥行きのない話になっているという講評が出る。

『タンバリン』

喜寿を前に突然ボクシングを始めた女性。彼女を心配する娘や周囲の女性たちも、いつのまにかスパーリングという模擬戦に参加することになる。

家庭の描き方や時間が交錯する部分など、気持ちの悪いところを書けている。変な事をやっているということを耐えられる精神を持っている。上演という形式との緊張関係、戯曲とは何かという格闘は見えないという指摘があった。

『群れる青、トコロ。』

母に出て行かれ、父を亡くした3兄弟が住んでいた。そこへ昨年母親を亡くした従姉妹の

姉妹が訪れる。少しずつ次の場所へ向かっていく5人の姿を描き出す。
親を亡くした30代くらいの登場人物たちが、なんとなく頑張ろうとしている空気感がいい。出来事が全て舞台上にあり、裏側が創造されていない。舞台で見えていない部分で奥行きを考えさせられるのが必要だという講評が寄せられた。

(休憩)

作品数を限定せず1回目の投票を行う。

『firefly』佳作として1票

『タンバリン』2票

投票結果を受け、『タンバリン』が大賞に値する作品かどうかについて、討議を重ねた結果、審査員の意見の一致を見て、『タンバリン』が大賞作品として選定された。